

## SHOTEN KENCHIKU

## COLUMN 2 | PARIS



1. 映画館「ゴーモン・パテ・アレジア」のエントランス。さまざまなサイズのLEDユニットがはめ込まれたもので、中大画面サイドで異なる映像を映し出すことも可能。両ナイトは画面に配線なしで映像を表示している（撮影／Rémi Bouchard） 2. 映画館内階段（撮影／Rémi Bouchard） 3. 「Réveries Urbaines」裏の模型作品。都市空間における人や物の関係性を、十数パターンのシナリオにより来場者に直接体験させることを狙った（撮影／Sébastien Leclerc）

## インテリアを都市空間へ拡張する、挑戦的な仕掛け

美田 龍（デザイナーアーティスト）

**都**市と公共空間の関係に昨今、新しい動脈が生まれつつある。2016年11月、パリ14区にリニューアルオープンした「ゴーモン・パテ・アレジア」は、教会やオフェを跨むアレジア広場に面し、昔から地元の人達に親しまれてきた映画館である。フランスの映画配給会社ゴーモン・パテが数年を掛けて行った、直営の映画館の大掛かりな改修事業の一環で、建築基準のクリアや懐旧的な仕様への適応、文化施設の老舗としての存在感をアピールする。

外と内をつなぐ  
巨大スクリーン

改修工事を手掛けたのは、パリに拠点を持つ女性建築家エマニュエル・ゴトラン。文化施設の設計経験が豊富な彼氏は「映画館の内外がシームレスに街とつながり、自然な動線を構くこと」をコンセプトに掲げた。

ファサードの巨大スクリーンは、十数本の帯状の構造にLEDがはめ込まれたもので、歩行く人々の関心を惹く。雨が降る夜にはLEDの光が石畳に映り込み、ロマンティックな演出と化す。訪れる人がスクリーンを通り抜け入館するイメージでデザインされており、開放感のあるエンタランスホールは上層の腰壁を下階に現することで、複数を垂直方向へと書きつつも、奥へと進んでみたくなるプランニングとした。

ここでは映画鑑賞だけが目的ではなく、上映待ち時間に壁にすることや、待ち合わせや出会いの場所としての利用も考慮されている。パリ市で秋に開催される「ムー・ブランシエ」(白衣の舞)で、一晩だけ夜道で開催されるイベントなどの際に、デジタルアーティスト達の作品を披露するキンバストンでの使用も構想中である。

「ゴーモン・パテ・アレジア」の

都市とお隣しながらランドスケープへと拡張していく面白さは、長期的なスパンで考える都市計画ではなおさら重要な視されるべきではないだろうか。

日常のワンシーンが  
都市空間を変容させる

次に、日常のワンシーンをランズケープデザインへと変換した例として挙げたいのが、ドイツのヴィトラ・デザイン・ミュージアムで2017年1月末まで開催する展示「Réveries Urbaines (都夢の夢想)」だ。都市空間に丸太や回転遊具、港などとさまざまなスクールで出現したら、どんな環境や生活が生まれるのか。フントス・人プロダクションブリイナーのブルレック兄弟は、建築模型を植物や石などと組み合わせて展示することで、建築や遊具の上うな物質的なもの、水や火などの自然のものと都市の関係性を表現し、審美を投げ掛けている。展示什器と一緒に

考案された鉛状のライティングは、街灯の提案のようにも見える。巨大な回転遊具の円盤に沿って見る周囲の景色は、日常的な発見をもたらすかもしれない。流れる港があつたら、騒音は抑えられ、人々は流水に耳を傾けるようになるかもしれない。移動式の大きな暖炉があれば、腰を取りに集まつた人々の間に、会話が生まれることだろう。

おそらく、ブルレック兄弟の目的は、これらの構想を実現させることではない。ランドスケープ、建築、インテリア、ノロタフトが区別された社会において、「一つの興味なものが横断的に都市に関与することで、理想的な都市空間を実現する事が可能ではないか」そんなメッセージを投じているように思える。人々の関心や感覚に境界はなく、明日の都市空間には、あらゆる教訓や常識を超えるシームレスな表現が、ますます求められる事になるだろう。